

〔論 文〕

教皇フランシスコを出迎える新しい日本のカトリック教会 －多様化する信者の現状と課題を中心に－

オチャンテ 村井 ロサ メルセデス

Ochante Muray Rosa Mercedes

〔キーワード：多文化共生・カトリック・宗教〕

1. はじめに

2019年11月23日から26日まで、第266代教皇フランシスコが来日することになった。ローマ教皇の来日は、1981年の第264代教皇ヨハネ・パウロ二世以来で38年ぶりとなる。教皇フランシスコは東京、長崎、広島を訪れるほか、天皇陛下との面会や首相との会談などを行う。東京では日本各地の若者との集いを開き、上智大学を訪れ、さらにイエズス会員で高齢であったり病気にかかっている司祭を訪問するなど、82歳の教皇にしてはハードな日程となっている。今回の教皇来日のテーマは「すべてのいのちを守るため～PROTECT ALL LIFE」であり、2015年に発表された回勅「ラウダート・シ、私たちの共通の家の世話をする」の「被造物とともにささげるキリスト者の祈り」に記された言葉から取られていると公式ホームページでは述べられている。全ての人の価値と尊重を守るため、世界に向けて「核兵器に関するメッセージ」と「平和へのメッセージ」が発信される予定である。

前述したように、日本にローマ教皇が訪れるのは2回目となる。しかし1981年の教皇ヨハネ・パウロ二世の時と大きく異なる点として、日本人信徒の高齢化と多言語、多文化からなる信徒の増加が挙げられる。

本論では、日本のカトリック教会にとって大きなイベントとなる教皇訪問を通して見えるカトリック教会の現状、特に外国人信徒と日本人信徒の割合がほぼ同率の地方の教会の現状について述べることにする。筆者は教会の現場で活動している当事者の立場から、調査として訪問した教会の事例を、当事者の話を加えながら現状をまとめていく。また、日本の京都教区、名古屋教区、横浜教区、東京教区など司教団の教書やその元となっている「日本カトリック司教協議会社会司教委員会」の「国籍を超えた神の国をめざして」（2016年）における課題について言及する。さらに、他のエスニック・チャーチに比べると多言語、多文化からなる信徒で

きているカトリック教会が日本において多文化共生が実現できる場となる可能性について、また日本における多文化共生社会の実現への教会の役割について考察する。

2. 日本カトリック教会の現状

カトリック中央協議会が報告した2018年1月1日から12月31日の集計「カトリック教会現勢」では、カトリック信者数（信徒・聖職者など）は44万893人となっている。教皇ヨハネ・パウロ二世が来日する前の1979年の信徒数は40万1,716人となっていた。出入国管理及び難民認定法」が改定・施行された1990年では42万8,830人、1999年には44万3,644人、2009年には44万9,704人と増加傾向であったが、翌年から減少し始めた。しかし2018年には9年ぶりに61人の増加が見られた。

79年のデータと比べると信者数が急激に減ったとは言えないが、少子高齢化の波から逃れられず信徒の減少と高齢化が進んできている。しかし、表1で分かるように、埼玉、東京、名古屋、沖縄では増加傾向にある。この新しい風をもたらしているのが、アジアからはフィリピン、ベトナム、南米からはブラジル、ペルーなどからのニューカマー移民の増加である。11月

表1 カトリック信徒数

教区	信徒数			
	1979年度	1999年度	2009年度	2018年度
札幌	17,484	17,961	18,039	16,258
仙台	12,336	11,256	10,949	9,881
新潟	7,092	7,502	7,413	7,265
さいたま	13,664	19,129	20,957	21,756
東京	68,090	85,375	96,157	97,656
横浜	38,313	52,865	56,376	55,466
名古屋	18,899	24,899	26,251	27,350
京都	19,705	19,704	18,563	18,010
大阪	56,894	55,915	53,898	49,438
広島	19,614	21,560	20,334	20,852
高松	5,404	5,524	4,910	4,548
福岡	28,489	31,540	30,703	30,222
長崎	74,784	69,033	63,483	60,993
大分	5,759	5,925	6,290	5,974
鹿児島	9,790	9,332	9,570	9,074
那覇	5,339	6,124	5,811	6,210
合計	401,716	443,644	449,704	440,893

出典：カトリック中央協議会「カトリック教会現勢1979年、1999年、2009年、2018年」より作成

表 2 日本籍・外国籍司祭数

	1999年度			2009年度			2018年度		
	司祭			司祭			司祭		
	日本籍	外国籍	合計	日本籍	外国籍	合計	日本籍	外国籍	合計
札幌	56	27	83	44	21	65	40	13	53
仙台	30	37	67	24	17	41	16	14	30
新潟	24	11	35	24	11	35	22	14	36
さいたま	36	31	67	35	25	60	26	23	49
東京	233	190	423	235	135	370	205	129	334
横浜	78	70	148	66	50	116	60	26	86
名古屋	63	76	139	66	70	136	60	72	132
京都	31	38	69	30	29	59	27	20	47
大阪	94	95	189	81	70	151	77	77	154
広島	46	49	95	42	29	71	36	23	59
高松	13	36	49	14	47	61	10	28	38
福岡	56	42	98	50	28	78	41	26	67
長崎	141	14	155	133	11	144	127	13	140
大分	24	29	53	29	20	49	27	16	43
鹿児島	31	15	46	28	13	41	25	15	40
那覇	9	11	20	10	18	28	6	15	21
合計	965	771	1736	911	594	1505	805	524	1329

出典：カトリック中央協議会「カトリック教会現勢 1999年、2009年、2018年」より作成

末に来日する教皇フランシスコは、多様化する信者からなるカトリック教会の新しい顔を見ることになるだろう。

日本カトリック難民移住移動者委員会（略称 JCaRM）関係者に確認したところ、信徒数のうち外国人の数の統計は今まで集計しておらず、外国人信徒数の正確なデータはないとのことである。しかし、『各国の在留者数×各国の人口に対するカトリック信者数（%）』の値をおおよその在日カトリック信者数としており、その値は 52 万 4,703 人である。朝日新聞のデジタル版でも日本における外国人カトリック信者数は 52 万人以上とされている。

筆者が確認した地方の A 教会では、洗礼台帳のデータから毎年教区に幼児（7 歳未満）及び成人の洗礼の報告を提出しているが、過去 3 年のデータを見ると 2016 年に洗礼を受けた人数は 14 人（ブラジル 2 人、日本 2 人、ペルー 5 人、ケニア 2 人、ベトナム 1 人）、2017 年では 8 人（ブラジル 5 人、フィリピン 2 人、日本 1 人）、2018 年は 13 人（ブラジル 4 人、フィリピン 2 人、日本 5 人、ペルー 2 人）であった。数字からわかるように、ほとんどは外国に繋がりのある者の洗礼であった。これは A 教会特有の現象ではなく、外国人信徒の割合が日本人信徒を上

回るのが今や地方の現状ではないかと言える。そのため、カトリック信者数の 44 万 893 人の中には 80 年代後半から増え続けている移民の子どもたちや新たに教会に籍を置き始めた外国人信徒もその数に含まれていると考えられる。

ここで課題として取り上げられる点は日本人・外国人司祭の減少である。上述したように信徒数は大きく減少したとは言えないが、表 2 から読み取れる通り、司祭の数が 99 年では 1,736 人、2009 年は 1,505 人、2018 年では 1,329 人と急減、また高齢化している。しかし、これは日本特有の課題ではなく、ヨーロッパや北米でも司祭は減少傾向にあり、同じ課題を抱えている。地方では一人の司祭が二つの小教区を担当する、または巡回するような形をとっている。また多様な信徒の言語ができる司祭も少ないため、多様な信徒の霊的なニーズに応える難しさがある。筆者が行ったインタビューでは、自分たちの国でカトリック信徒だったが、日本に来てからプロテスタント教会や福音派教会に通うようになった信者は、ほとんどの場合、「母語で話す牧師さんの話を聞くのが好きだから、牧師の話が心に響くから」などの理由を挙げる者が多い。「日本語のミサに参加すると、ミサを聞くだけで参加している感じはしない」と挙げる者もあり、第一世代移民にとって母語でのミサの重要性が感じさせられる。

3. 日本カトリック教会と多様化する信徒の受入れ

90年代の在留外国人の増加に伴い、ニューカマーの労働環境やニューカマーの子どもたちの教育など研究テーマも増えたが、その中でも特に「移民と宗教」の視点からの研究に関心が高まった。移民がもたらす新宗教、カルトの研究及び在留ブラジル人のペンテコステ派教会や心霊主義については樋口（1998）、山田（2008）、星野（2012）が詳しい。移民の増加と日本のカトリック教会とニューカマーの研究やブラジル人コミュニティとカトリック教会の研究については白波瀬（2012, 2016）、星野（2016）が、また三木（2012）は滞日ペルー人の「奇跡の主」の祭りについての研究を行っており、野上（2010）は在日ベトナム人宗教施設が持つ社会的意味について、中西（2016）は結婚移民のフィリピン人女性とカトリック教会についての先行研究を残している。これらの中では、多民族の者が集まる場所及び文化を継承できる場として教会の役割の重要性に言及している。

3-1 日本のカトリック教会の司教団の方針

本節では日本のカトリック教会を監督する司牧者の考えや方針について、「国籍を超えた神の国をめざして」（2016）に基づいて、司教団のメッセージを検討する。

最初は筆者が長年関わっている教会がある京都教区の司教の年頭書簡「教会の《もてなし》の使命」(2019)について述べる。ここでは、『「日本の教会」というとき、それは「日本人の教会」(Church of Japanese)ではなく、「日本にある教会」(Church in Japan)という意味です』と述べ、「移住してきた信徒たちにとって、宗教(カトリック)は生活にとって欠かせないものであるだけでなく、アイデンティティーや出身国の民族性の基盤である」ことに関し信徒の理解を求めている。その中で、『京都教区でも、ラテンアメリカからの移住信徒のおかげで、30年前には知られていなかったブラジルの「アッパレシーダの聖母」のお祭りや、ペルーの「セニョール・デ・ロスミラグロス」(奇跡の主)のお祭りなどを一緒にお祝いするようになった』ことを例として挙げている。また「気兼ねなく滞在できる家」という、居場所としてのカトリック教会を挙げている。書簡の終わりに、外国人信徒へのメッセージとして「みなさんの国のようにキリスト教文化の根がないので、信仰を生きようとすると難しさを感じるでしょう。みなさんが母国語で霊的司牧と養成をより頻繁に受けたいという望みはよく理解しますが、地元の教会との交わりも大切にし、より豊かな教会共同体づくりに協力してください」と呼びかけている。

カトリック名古屋教区司教の司教教書「教会の扉を開こう」(2016)では、名古屋教区の教会の目標の一つとして「国籍を超えた神の国を目指す共同体をつくる」多国籍、多文化の共同体を希望のしるしとし、『教会を考えると、「日本人の教会」という意味ではなく、どこの国の人であっても日本で生活する全ての信者で構成する「日本の教会」なのです』と述べている。さらに、母語でミサに与るための配慮や、外国語のできる司祭がいない場合、式自体は日本語で行うとしても、聖書朗読、聖歌、共同祈願などは信徒の母国語で行うなどの努力を求める。小教区共同体に分かれてしまわないよう定期的に国際ミサを開き、小教区に籍を置き小教区共同体のメンバーであると意識を持たせるよう勧めている。

横浜教区の司教ラファエル梅村昌弘氏は、「外国籍信徒司牧の基本方針」(2008年)で「外国籍信徒は横浜教区民である」とし、『「お客さん」ではなく、わたしたちの兄弟姉妹である』と述べ、「外国籍信徒の子どもたちが自らの居場所を見出し、小教区に馴染めるよう、日本人信徒の子どもたちと一緒に日本語で信仰教育を受けられるようにする」と述べている。

カトリック東京大司教菊地功氏は、東京教区ニュース第359号の「主の降誕のご挨拶」にて、『「日本の教会」が「外国人」のゲストをどうもてなすのかという問題意識ではなく、「普遍教会」の視点から、日本を含めた世界各地から集まった兄弟姉妹が一緒になって力を合わせ教会

共同体を育てあげる』と述べている。また、「多様性における一致を掲げて」宣教司牧指針の方向性について（2018）では、「カトリック東京国際センターCTIC」の約30年間における活動について触れている。そこで氏は外国籍の人々が直面する課題が複雑化し、人数の増加から、対応すべき課題が山積みされていることを指摘した。さらに、『外国人の霊的ニーズにこたえる』ことが、大切であるが、教区共同体との絆を失い、全体との連携のない独立した共同体を生み出すことのないように、定住する方々も増加する中で、主に日本語を使う子どもたちの存在にも配慮する必要がある、できる限り、小教区共同体との連携の中で、外国人の霊的ニーズに応える方策を探りたいと思います』と氏は述べている。「ミサごとに移動し続けるような事態は避けたい」と、教会の数が多く移動が便利である東京教区で特有の問題も指摘している。地方の多くの場合、町に一つしかないカトリック教会であるため言語によるミサごとでの移動は難しいが、車で1時間かけ隣町の母語のミサに参加することもある。

上記の司教のメッセージから日本のカトリック教会は「日本人の教会」、「日本人だけで構成する教会」ではないという意図が読み取れる。「お客さん」、「ゲスト」ではなく、多民族、多文化であるが「同じ信仰を持った兄弟姉妹」であり教会の一員であるということを日本人信徒へ理解を求め、一つの教会、一つの共同体として受け入れるための配慮や協力を求めている。また日本語が堪能である子どもの信仰教育が重視されており、ボートピープルで来日したインドシナ難民から召命を受けて司祭や修道女になっているベトナム人の司祭や修道女が出て来ている。そこには今増え続けている移民の子どもたちの中に今後日本の教会を支える将来の司祭、修道女や教会の維持のために力を注ぐ信徒が生まれる願いも含まれているのではないかと考えられる。

少子高齢化の中、地方の教会で特に見られる現象として多様な信徒からなる教会がある。日本人の高齢者信徒、年代のフィリピン人女性、ブラジル、ペルー人の信徒と最近増え続けている技能実習生として来日する若いベトナム人信徒、フィリピン人信徒という構成でできているのが最も多い。また教会学校で勉強する子どもたちのほとんどは移民の子どもたちである。しかし、子どもたちは日本語の方が堪能で、両親または母親が参加する母語のミサにだけ参加するとミサの内容が理解できず、信仰心が育つよりも教会をつまらない場所、行きたくない場所と否定的に捉えることもある。結果的に成長につれ教会から離れる場合が多い。そのため、子どもが最も堪能である言語で信仰について学ぶ機会を小教区が提供するの不可欠である。母子ともに受け入れられている場所や、父母が何らかの役割を果たし、生き生きとした姿を見

せられる場としての教会の役割も重要である。単純労働で日本語も不自由である保護者は、時には子どもに頼らなければならない場面も多い。しかし、父母が教会で様々な奉仕活動をし、頼られる姿を見せられれば、子どもに自信がつき、親子の良好な関係につながる。信仰によって内面的に安定した父母、または教会で父母を支える大人や、問題を共有できる大人が周りにはいることは、孤立の危険性を避けることにも繋がるだろう。

4. 日本のカトリック教会の新たな信徒の姿

筆者が訪れる教会で移民共同体が存在するかどうか確かめる一つの方法として、その教会に移民たちの国の風習として祭る御像や御絵があるかどうか確認するというのがある。(写真1:「聖母像の前で祈る信徒」の様子:筆者撮影)

例を挙げると、ブラジル人信徒の場合は「アパレシダの聖母」の御像、フィリピン人信徒の場合は「サントニーニョ」の幼きイエス像、ペルー人の「セニョール・デ・ロスミラグロス」(奇跡の主)の御絵、ボリビア人の「ウルクピニャの聖母像」などが挙げられる。数人の外国籍信徒がいるだけではなく、属する教会内で自分たちの国で信心され祭られる「主イエス」、

「聖母マリア」または「聖人」の御像が見える形にできるこ

とは、その教会内で活動しているなんらかのエスニックコミュニティが存在し、教会内での活動が認められているといえる。

以下に筆者が関わったコミュニティの特徴や課題について述べる。

4-1 フィリピン共同体

国際結婚して日本人の妻となったフィリピン人女性や日系フィリピン人として「定住者」の在留資格を持って家族と来日しているフィリピン人、そして技能実習生として来日しているフィリピン人が最も多い。筆者が訪問した三重県内の教会では、比較的に日本語ができ、滞在歴が長い国際結婚して日本人の妻となったフィリピン女性がリーダーとなってコミュニティをまとめる役割、また日本人共同体や他のコミュニティと繋ぐパイプ役となっている。新しく来日している技能実習生の通訳や地域についての情報を教えるなど、皆の母親的な役割も果たし



(写真:「聖母像の前で祈る信徒」の様子:筆者撮影)

ている。

教会で行われる代表的な祭りとして、1月にフィリピンのセブ島で開かれる「サントニーニョ祭」(幼きイエスの祭り)そして、「フロレス・デ・マイヨ」(5月の花という聖母マリアの祭り)である。これらの祭りで「幼きイエス像」あるいは「聖母マリア像」を担いでプロセシオンという行列をする。

また月一回各家庭に集まり、家庭を回る聖母マリア像を囲んでロザリオの祈りをするような活動も見られる。

4-2 ベトナム共同体

今までポートピーポルとして来日したベトナム人は限られた地域に定住し、その周辺地域のカトリック教会に通って共同体を形成していた。しかし、技能実習生として来日するベトナム人は急増しており、日本中のカトリック教会に訪れる傾向が見られる。しかし、カトリック教会がどこにあるか知らないため最初に辿り着くまでに時間がかかったりするのをよく聞く。筆者が初めて教会に来たベトナム人に教会をどのように見つけたのかと尋ねると、「(教会がどこにあるのかわからず)来日2年目でやっと日本語で検索して教会を見つけた。後1年で帰国するので残念だ」と語った。教会を見つけるのに時間がかかったと残念そうに語る青年の姿から日本語で情報を収集するのが難しい彼らにいかに関心を持って町の情報を提供するかが課題である。またその中で内面的な支えとなる教会という場を提供し、もっと教会活動が地域に浸透するように彼らを迎える体制を整える必要がある。「社会に開かれた教会」、地域と連携して弱者を支える教会の姿、市町のNPOまた市役所などと連携して移民を支える教会の役割は今後も必要不可欠である。

ベトナム語のミサが開催される地域がなく言語ができる司祭が不在のため、日本語のミサに参加するベトナム人も多い。筆者が訪問した東京のカトリック四ツ谷教会では、毎週日曜日にベトナム語のミサが開催され、訪問した主日のミサに参加していたベトナム人は、広い教会であるが椅子を全部埋めており、後ろで立ち見する者までいた。筆者が見た限りでは1,000人以上参加していたのではないと思われる。技能実習生、留学生などの若いベトナム人が多かった。筆者はベトナム語がわからなかったが、聖歌隊や若者の声で活気に溢れていたのは体感的に理解できた。このように100人以上の規模で集まる教会は大阪教区、名古屋教区、埼玉教区にもある。

地方ではベトナム語を話す司祭がない場合、日本語の主日のミサに参加するのが最も多い。日本人と交流する機会が多く、若い彼らに清掃ボランティアの参加への期待が寄せられることも多々ある。筆者が関わっている教会ではベトナム語のミサはないが、教会によく参加する若者が日本語のミサ後教会に残り、ベトナム語で祈りの集いを開き、自由に教会の施設を使っている。自分たちで毎週お菓子や飲み物を買って、ベトナム人同士で交流する場として教会が存在している。

4-3 ラテンアメリカ共同体

教区によってラテンアメリカ共同体としてブラジル・ペルーなどを合わせることもあるが、言葉や文化、祝う祭りも異なるため、ここではそれぞれ異なる点及び共通する点について述べる。

ブラジル人が圧倒的に多いためコミュニティの体制が整い、独自に組織化している所もある。ポルトガル語を話す司祭が少なく、司祭が巡回するような場合が多い。中には対応するためスペイン語ができる司祭がポルトガル語の勉強し、ポルトガル語でミサを司式することもある。ポルトガル語ができる司祭が少ないため、月1回から2回程度のポルトガル語のミサに人々は参加する。霊的な満たしを受けるため、時にはブラジルから司祭や宣教師を招き、連休などを利用して黙想会などの集いを開いたり、ネットワークを活かして他の地域のブラジル人信徒に呼びかけたり、毎年行う地域では定番の集いとなっている。しかし、これには莫大な資金が必要となり、基本的にイベントなどを通して宣教師の交通費、滞在費、礼金などを賄う。現在のカトリック教会には様々な共同体があり、多くの場合聖霊刷新（CCR）のカリスマを受けたものが多い。南米ではこのような運動・共同体は一般的になってきているが、日本では理解されにくく、長年活動が続けているが、小教区内での取り組みとして盛んではない。

彼らの活動に日本人信徒や時には司祭からも理解されず、誤解から分裂を招く危険もある。確実に担当司祭や教区の許可を受け段取りを踏むと同時に、日本人信徒、担当司祭や教区も彼らの霊的なニーズを理解する必要がある。

スペイン語圏、主にペルー人の割合が多いが、ボリビア、アルゼンチンなどからの信徒も多い。ここでは最も多いペルー共同体について取り上げる。月一回スペイン語のミサを開くとこ

ろが多く、大きな共同体を形成するよりそのミサに参加するのが一般的である。他の活動に関わらないため、活動する範囲はブラジル共同体に比べると少ない。ペルー人を取り纏めるリーダーは冗談半分に「ペルー人はお葬式や洗礼式がないと来ない」と語る。しかし、10月に行われる「セニョール・デ・ロスミラグロス」(奇跡の主)の祭りには大勢のペルー人が参加し、またその準備のために集まる。



(写真:「多国籍信徒の祈りの集い」

の様子: 筆者撮影)

一人のリーダーは「ペルー人が教会に参加するきっかけとして、奇跡の主の祝いがある」と述べた。しかし時代と共にカトリックを代表するペルー人のお祝い「奇跡の主」の姿は変化し、ペルー人のためだけの祭りだったのが、筆者が確認したところでは教会全体の行事として集うところも増えてきている。日本人や他の共同体も交えてプロセシオン(行列)で「奇跡の主」の御絵を担いでいる。またミサ後に開かれるイベントの収入も所属する教会に寄付する等、既に欠かせない10月の行事になっている。紫という「贖罪」、「回心」の意味のある色や「重い奇跡の主の御絵のあるみこし(神輿)を担ぐことは、自分の罪の重さを背負う(のと同じである)」と行列に参加するペルー人はよく話す。これは単なる祭りではなく、在留ペルー人がキリスト教徒である自分自身の意識を再確認し、忘れないための大切な行事であると考えられる。

ブラジル人、ペルー人の場合、定住化が進んでいるため、同じ地域に長年住み一軒家で生活する家庭が少なくない。そのため同じ教会で長年に渡り活動し、奉仕するようなリーダー的役割を果たす者が出て来ている。筆者は浜松や名古屋で開かれる全国担当者会に出席したことがあるが、彼らが最も求めるのはリーダーの養成である。自分たちの国で養成を受けカテキスタとなり、洗礼など様々な教えができる者もいれば、来日してから熱心に教会に通い、教会での奉仕はしたいが学ぶ場所がないと霊的な指導を求める者も多い。

最後に、上記で述べた共同体に共通しまとめられるのは「聖母マリア」への信心である。ロザリオの祈りの集いは祈りの形式が同じであるため各言語で祈り、皆の母である聖母マリア像を囲んで共同体が一つとなる。ベトナム、フィリピン、ペルー、ブラジル、日本が集まって祈ることができるのは普遍的な教会であるカトリックのメリットである。

このように言語が異なっても世界中に広がるカトリック教会にて一致団結している。これは他の教会にはない財産である。

5. 教皇フランシスコの来日

2019年9月から教皇来日の正式なプログラムがカトリック中央協議会から発表され、東京ドーム、長崎県営野球場（長崎ビッグN）にて開催されるミサに参加するための申し込みについて、各教会で案内が始まっている。海外のメディアでは早い段階から教皇の来日についてのニュースが報道されており、6月には既に日程が発表されていたが、日本カトリック中央協議会から正式なお知らせがなく、ようやく9月13日に教皇の来日決定や、日本語と英語の特設サイトにおけるミサへの応募やイベントについての案内が行われた。

筆者の調べでは、各教区や小教区によってミサの会場までの行き方が異なる。ツアー等を利用して長崎、東京に行く信者とバスを借りて大きな団体で11月25日の東京ドームに参加する者が多かった。

在住ブラジル人向けの雑誌「Alternativa」と「Super Vitrine」や在住フィリピン人向けの「Philippine Digest」のフリーペーパー11月号、また在住ペルー人向けの「Mercado Latino」、「International press en español」のニュースサイトでも教皇来日について取り上げられ、在住ブラジル人、フィリピン人及びペルー人の関心が高まった。

しかし、ミサへの応募などについての情報が行きわたっておらず、申し込みが必要と知らないまま受付が終了してから教皇のミサに参加したいという声が多く上がったという話が教会のリーダーや関係者から聞かれた。筆者自身も三重のカトリック教会で活動しており、「参加したいけれど申し込み方法が分からない」、「受付締め切りが終わったけど教皇様のミサに参加したい。どうしたらいい」と電話を受ける等、多くの在住外国人に情報が行き届かなかった問題が見られた。中には、「月一回の各言語のミサにだけ参加する者が多く、情報を知ったのは締め切りが終わってから。また登録方法が分からずグループの調整だけして参加できると思っ



（写真：「ブラジル・フィリピン人向けのフリーペーパーが11月号：筆者撮影）

ていた人も多かった」と語った者もいた。

日本語も英語も不自由な信者にとっては特設サイトへのアクセスがそもそも難しく、日本語ができる信者に頼りながら申し込みを行った話も伺えた。

日本各地からの外国籍信者の参加者数は現時点では不明だが、筆者が確認した滋賀、三重、愛知、浜松では一つの教会や周辺の教会と一緒にバスを借り、90人から100人の団体で東京のミサに参加するとのことである。ある三重県の教会では、バスを借り90人以上の日本人、フィリピン人、ベトナム人、ブラジル人、ペルー人、ボリビア人の多国籍共同体、またはマルチ・エスニック共同体で東京ドームのミサに向かうとの情報も得られた。

また東京ドームのミサの応募に落選した信徒でも、東京に行って教皇が訪れる場所で出待ちをするなど、一目でも教皇に会いたいという信徒が多い。

ここではキーパーソンしてリーダーの役割が欠かせない。申し込み、取りまとめ、お金の支払いなど、日本人と外国人と橋掛けとなる外国籍信徒の役割は教会の維持に関して最重要である。

5. 終わりに

1981年、教皇ヨハネ・パウロ2世が東京の後楽園球場でミサを司式された時、参加者は3万5000人だった。教皇フランシスコの来日では、長崎ビッグNで3万人、東京ドームで5万人の参加者があったとみられる。新聞やテレビで大きく取り上げられ、世界におけるカトリック教会の影響力や教皇フランシスコの人柄に関心や親しみを感じた日本人もいただろう。

青年の集いでは日本在住の移民の子どもや難民の青年の参加があり、多国籍の青年が集った。また東京ドームで開催されたミサでは聖書朗読、賛美歌、共同祈願は多言語で行った。これにより、教皇に、また世界中に今の日本のカトリック教会の現状や多様な信徒からなる教会であることをアピール及び発信することができたのではないかと考えられる。

少子高齢化の波は進み、もう逃れることはできない。日本の経済成長を維持するためには使い捨てる外国人労働者ではなく、日本を支える「人間」、あるいは共に暮らし地域住民になる「人間」が最も必要とされている。

日本は「日本国民」で構成するという考えから脱却し、多様な国籍、多様なルーツの人であっても日本で生活するすべての人で構成するのが「日本」であるという考えに移る。これについてはカトリック教会の方針が参考になるのではないかと考えられる。

日本のカトリック教会にも課題はまだあるが、最も弱い人々を助ける使命のもと、孤立している母子家庭、技能実習生、外国人労働者とその子どもに、日本人信徒との交流を通して地元の情報を与え自立を促進するためのサポートを行うなど、今後も活動し続けることを願う。

後注

¹⁾カトリック教会現勢 2018年、2009年、1999年 カトリック中央協議会 司教協議会事務部
広報課 2019年7月 (<https://www.cbcj.catholic.jp/japan/statistics/> 閲覧日：2019年10月
25日)

²⁾「時代映すカトリック教会 増える外国人信者、ミサ立ち見」、「朝日新聞デジタル」 2019
年11月18日 (<https://www.asahi.com/articles/ASMCK5392MCKUTIL007.html>
閲覧日：2019年11月19日)

引用・参考文献

柳田國男 「桃太郎の誕生」 『日本昔話』 小澤俊夫 三省堂 (1993) pp. xx-xx

2016年 司教教書 教会の扉を開こう — 御父のいつくしみに支えられて —

<http://nagoya.catholic.jp/2016bishopletter.pdf>

カトリック京都司教 パウロ大塚喜直、2019、「教会の《もてなし》の使命～国籍を越えた神の国をめざして～」司教年頭書簡 『京都教区時報』 494号、pp. 1-7

カトリック名古屋教区司教 松浦悟郎 2016「教会の扉を開こう — 御父のいつくしみに支えられて —」 司教教書 URL:<http://nagoya.catholic.jp/2016bishopletter.pdf>

カトリック東京大司教菊地功、2018、「多様性における一致を掲げて」宣教司牧指針の方向性について、『東京教区ニュース』第353号

カトリック東京大司教菊地功、2019、「東京教区の皆様 主の降誕のお喜びを申し上げます」『東京教区ニュース』第359号

樋口直人、1998、「在日ブラジル人と日系新宗教」『一橋研究』2(31) 一橋研究編集委員会

星野壮、2016、カトリック教会による在日ブラジル人信徒への対応：『カトリック新聞』の記事を中心にして 2：23-50「宗教と社会貢献」研究会

三木 英・櫻井義秀編著、2012、『日本に生きる移民たちの宗教生活—ニューカマーのもたら

す宗教多元化』ミネルヴァ書房

中西尋子、2016、「結婚移民のフィリピン人女性の増加とカトリック教会」 移民研究 第 11 号 pp. 69-80

日本カトリック司教協議会社会司教委員会 「国籍を越えた神の国をめざして」改訂版 2016 カトリック中央協議会

野上恵美、2010、「在日ベトナム人宗教施設が持つ社会的意味に関する一考察：カトリック教会と仏教寺院における活動の比較」鶴山論叢 第 10 号 pp. 41-56

オチャンテ村井ロサメルセデス・オチャンテカルロス、2017、「カトリック教会における多言語・多文化環境の実態－三重県伊賀市の事例－」奈良学園大学紀要 第 7 集 pp. 167-177

白波瀬達也、2012、「カトリック教会による滞日外国人への支援(多様化する現代日本の「移民と宗教」の理解に向けて、パネル、第七十回学術大会紀要)「宗教研究」85 巻 4 輯

谷 大二、2008、『移住者と共に生きる教会』女子パウロ会

山田政信、2008、「カリスマ刷新運動－プロテスタントの伸展に抗うブラジル・カトリック教会－ラテンアメリカ・カリブ研究 第 15 号, 37-46 頁 [研究ノート]

横浜司教区教区長司教ラファエル梅村昌弘、2008、「指針「外国籍信徒司牧の基本方針」及び「秘跡等に関する司牧指針」司教書簡